

九州地域循環共生圏の創造に向けて

既存の取組事例を交えて

令和元年5月18日

環境省 大臣官房政策立案総括審議官

和田 篤也

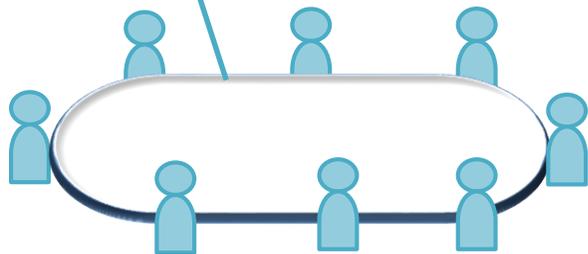
地域循環共生圏の基本哲学(大局的視点)

■ 地域循環共生圏の構想において主要な3つの要素を組み込む

「**自立分散**」、「**相互連携**」、「**循環共生**」を組み込んだ地域循環共生圏の構想する際は、**地域課題解決**や**地域資源活用**のプライオリティ・タイムラインに加え、**価値観**を含む社会トレンドやSociety5.0がもたらすテクノロジーの深化を踏まえ、地域の個性を生かしながら、関係者の**ボトムアップ**で構想を作る。

構想の策定プロセス

自治体だけでなく、また、地域内だけでなく内外の関係者との**協働**が重要
(例) 熊本県阿蘇地域の地域循環共生圏の構築
鹿島市ラムサール条約推進協議会



- ボトムアップによるマルチステークホルダーの連携
- 基本哲学のビルトイン(共感の共有)

中心となる3要素

自立・分散



相互連携



循環・共生



地域循環共生圏

脱炭素・SDGsを実現

Society5.0による分散化のトレンドも活用し、他地域に過度に依存しない形で、地域のオーナーシップをベースに地域資源(ハード・ソフト)を活用して**地域経営**を行う。

全てを1地域で実現することは不可能。地域で閉じずに、農水産物、原材料やエネルギーなど不足を補い合い、人材・資金・情報等を**共有・交流**することにより新しいビジネスや成長を生む。

生産やビジネス活動は循環しなければ持続せず淘汰される。「**循環**」を地域経済や個々のビジネスに組み込む。
全ての基盤となる健全な環境を確保し、自然や多様な主体と「**共生**」する地域社会をつくる。

生まれる地域循環共生圏は、レジリエントで、地域内外で多様な主体と連携し地域の価値を高め、**ボトムアップでイノベーション**を起こす機能を持つ。相互連携により個別最適ではなく**地域を超えた最適化**が図られる。

地域循環共生圏の基本哲学(マクロ)

- **地域経営**: 地域のニーズや得意分野・課題からプライオリティ付けを行い、自分の地域で行うこと、他地域と協力して行うこと等を明確化し、適切な**役割分担**の下で**指標**も活用しながら柔軟に運営する。
- **地域資源**(エネルギー、文化・観光、食、自然、農林水産等)で**稼ぎながら課題解決**することで、持続可能な形で地域循環共生圏の創造に取り組む(例:唐津市や熊本市ではエネルギーの収益を地域に再投資)。

地域循環共生圏の構想をつくる際に不可欠なプロセス

得意&必要
⇒自分の地域でやる

苦手&必要
⇒得意な人・地域・企業と

得意&不要
⇒欲しい人・地域・企業に

苦手&不要
⇒他地域で

得意とする地域資源と解決すべき課題の特定、プライオリティ・他地域との広域連携等を明確化

①地域の課題を解決

1. 税金投入が必要な事業は財政的に持続しない(ローカル性が極めて大きい事業は民間事業になりにくい)
2. 地域全体の価値(利便性等)は上がるが頭打ち
3. (マイナスをゼロにするだけは)ワクワクしない、人を引きつけられない



同時に進めることで価値が上がる

②地域の価値・資源で稼ぐ

1. 地域全体の価値が上がる
2. ワクワクさせる、人を引きつける
3. 収益を生み、地域で投資&課題解決

指標による地域経営

地域内外の資源を活用し、いつまでに何をどこまで引き上げるか

ハード指標

道路鉄道整備、交通アクセス、施設数、住宅戸数、公園、上下水道
GDP、企業数、雇用者数...

これまでのまちづくりの指標＝供給視点中心



ソフト指標

幸福度、安心、つながり、健康寿命、働きがい、子育て・福祉・教育満足度、自然利用、祭りアート...

足りない指標＝需要視点

地域循環共生圏の基本哲学(プロジェクトベースの視点)

■ プロジェクトづくりは地域のニーズ・課題から入る

トップダウンではなく、地域の具体的な**ニーズ・課題**を捉え、地域の**固有価値**や**資源**を活用し、**技術とデザイン**の組み合わせで価値を高めていく。

ニーズ(地元の、将来の、顧客の(国内外)ニーズ)

ニーズのない供給サイドの視点では人は動かず、地域が疲弊するだけで価値が高まらない&持続しない。

地域価値・資源(得意分野)

地域の価値、資源はすでにそこにあるもの。ないものを求めるのではなく、地域内外の人と固有の価値を再発見して尖らせる。

技術(デジタル、AI、ロボティクス、エネルギー、バイオ等)

技術で制約(空間、時間、人材、資金、エネルギーなど)を克服。

■ デザイン力による価値向上
■ ブランディング・ストーリー化
■ 共感力上げる

最後は、地域固有の価値を「どう見せるか」。デザイン力で価値向上をしたあとは、ブランド化で更に尖らせる。

地域発のグローバルバリューを創出

マーケットは国内を超えてグローバルへ。グローバルを目指す地域で連携できる。

北九州市の事例

「鉄冷え」を受けた新たなビジネスの必要性

製鉄業等の素材技術や人材、製造業からの循環資源

学術研究都市や市の技術助成による新たな循環技術の開発

公害克服経験を活かした積極的な国際貢献・視察受入れ

国内を越え、アジアの北九州エコタウンへ

地域循環共生圏の基本哲学(プロジェクトベースの視点)

■ 異分野のかけ算を増やして単一の取組から連携による統合的取組へ

最初の入り口は地域の得意なもので**取り組み易い**ものから始め、構想に基づき徐々に**他分野と連携**し、他のニーズや課題への**チャレンジを拡大**することで**新たな価値を創造**していく。

熊本市の事例

廃棄物発電による地域の自律分散型エネルギー(電気+熱供給)

地域資源(廃棄物)活用
エネルギー生産



地域新電力による供給

地域ビジネス



蓄電+公共施設等の強靱化

防災・まちづくり



市基金による再エネ省エネ投資(電気自動車など)

モビリティ・住宅

清掃工場の発電・熱供給から始まり、市と民間が連携して地域新電力からの公共施設等への電力供給+災害対策、収益を基金にした地域への再投資を行うことで、統合的取組を実現。

鹿島市の事例

清掃・ヨシの堆肥化による干潟の環境保全・資源循環

地域資源(自然環境)の保全・再生



有明海のワイズユースとしてのエコツアー

観光



「ラムサール」ブランド化による農業・漁業の振興

ものづくり

肥前鹿島干潟の再生・資源循環から始まり、ラムサールブランドを活用した観光促進、道の駅等との連携による農業・漁業ブランドの確立による統合的取組を推進。